

教職大学院

Newsletter

No.

19

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2010.02.26

蛇行した川

福井大学教職大学院客員教授 松田泰俊

もう 10 年以上も前のことになるが、朝日新聞の「窓～論説委員室から～」というコラムに「蛇行した川」という記事があり、今でもこの記事のことが強く心に残っている。

これは、川を管理する当時の建設省の研究機関「自然共生研究センター」が、岐阜県の本曾川沿いにつくった人工の川である。その内容は次の様である。

「・・・ここには、本曾川支流の水を引いた三本の人工の川が流れている。幅 2.5 メートル、長さ 800 メートルで、実験河川としては、世界でも最長クラスの規模だ。うち 2 本は蛇行して、「瀬」や「ふち」もある。残る 1 本は真っすぐな川で、水深は同じだ。研究員は、これらの川にすむ魚の数と大きさを比べる調査を続けている。研究員は、2 日間かけて、水中の魚を一時的に感電させて採取した。蛇行した 2 本のうち、1 本からは 10 種類 982 匹、もう 1 本からは 7 種類 627 匹の魚が取れた。直線の川は、4 種類 130 匹にすぎなかった。

蛇行した川には直線の川に比べ、少なくとも 5 倍の魚がすんでいたことがわかった。魚で最も多かったのはオイカワだった。体長は蛇行した川だと、3、4 センチ前後が目立ったのに、直線の川はそれより 1 センチほど小さかった。センターの研究員は「曲がった川は流速や水深など変化に富み、豊かな生態系をはぐくむ。魚にとってはえさを取ったり、隠れたりするのに都合がいいのでしょう」と語っている。自然の川はたいてい蛇行している。・・・」

この記事のことが今でも強く心に残っているのは、児童・生徒にとっての暮らしそのもの、生活そのものである授業、学校生活は、直線の川でなく、「浅瀬」あり、「ふち」ありの、蛇行した、曲がりくねった川のようにありたい、なぜなら、それが『子どもの学びの道筋』そのものであると思うからである。

花巻農学校で教えた宮沢賢治は「身体で覚えなさい。すると知識に感動できるのですよ」と、英語にも代数にもゲームを取り入れ、生徒を参加させ、考えさせる先生で、教

え子は「目で見えるように教えてくれるのです。そういう授業で覚えたことが実地に役立つのです」と述懐している。

文豪島崎藤村は、「人の世に三智がある。学んで得る智、人と交わって得る智、みずからの体験によって得る智がそれである。そういう自分は今日も行き詰まっているばかりでなく、出発のそもそもからすでに行き詰まっていた。でも、歩いて出るたびに道が開けた。地に触れるたびに活き返った」と言っていますが、直線ではなく蛇行をその生き方としているように思うのです。

すでに大正期、長野師範学校附属小学校にあって、日本の新しい教育の道を拓かれた淀川茂重先生は、「児童の教育は、児童にたちかえり児童によって児童のうちに建設されなくてはならない。そこからではない、うちからである。児童のうちから構成されるべきものである。・・・教育は児童の生活をよそにくわだてられるべきではない。児童の生活に、もとむるところを、それを中心にして構成され創造されていくべきものである」と解かれ、学習の場を「子どもの天地」、「子どもの生活場」である「郊外」に求め、そこには「あらゆる教科目がいきている」とし、学習の場とした「郊外」に幾度も幾度も出かけた。そして、「親しんでこそ理解は完全に行われるものなのではありませんまいか」という教えを残された。宮沢賢治の教え子が言っている。「ある先生はとて素晴らしい先生でした。教科書に書かれてあることを丁寧に説明してくれたのです。で、それだから、私はそのころに習ったことを全部、忘れました」と。

内容

蛇行した川(1)

大学教育改革プログラム合同フォーラム報告(2)

特集1: 教職大学院修士生の現在の実践と取り組み(5)

特集2: 冬季集中講座における学びの履歴(8)

福井大学教員免許状更新必修講習を終えて(10)

平成22年度概算要求 特別経費通る(12)

「大学教育改革プログラム合同フォーラム」ポスター発表報告

福井大学教職大学院 木村 優

2010年1月7-8日に東京都江東区の東京ビッグサイトにて「大学教育改革プログラム合同フォーラム」が開催された。全国の大学・大学院による研究、実践報告が行われる中、福井大学教職大学院から石井恭子、木村優の2名および事務から大学院系の児嶋美恵子が参加し、ポスターセッションにて本学の取り組みについて報告、発表した。

【発表の概要】福井大学教職大学院の取り組みについては主に以下二点を中心に報告、発表した。

第一は、教職専門性開発コース（ストレートマスター）のインターンシップの仕組みについてである。本コースにおいて、ストレートマスター院生（M1）は入学年4月から週3日間、拠点校でインターンシップを行い、学校の中で授業、学級経営、同僚教師との協働の在り方などを学んでいく。また、院生は週2日、大学院でのカンファレンスに参加してコースの仲間と教職大学院のスタッフに実践を報告し、自らの実践を丁寧に振り返りながら互いに学び合うことで専門性を確立していく。他教職大学院の実践的な学びに関するカリキュラムでは、数週間～数ヶ月の集中的な（教育）実習、あるいは週1回/1年間の断続的な実習で構成されることが多い。それに対して、本学のカリキュラムでは、院生の実践的な学びの過程を学校の1年間のサイクルを通じたインターンシップによって構成していることが特色である。

第二は、スクールリーダー養成コースの学校拠点方式についてである。現職教師が教職大学院や既設大学院で学び直すためには、一般的制度では職責校から離れて就学しなくてはならない。それに対して、福井大学教職大学院のスクールリーダー養成コースの院生となった現職教師は職籍校で働きながら自らが所属する学校の文化、文脈に基づいた組織学習と研究をすすめることができる。従って、この方式のメリットは、学校の経営や研究の推進において中核的役割を担う中堅教師を学校から引き離さないことにある。また、大学院とスクールリーダー院生の職籍校は拠点校契約を結んでおり、そこにストレートマスター院生がインターンシップとして入ることになる。これにより、ストレートマスターはスクールリ

ーダーの実践を観て、聴いて学び、スクールリーダーはメンターとしてストレートマスターの授業や学級経営の相談、指導にあたる役割を担いながら、彼ら/彼女らの活気溢れる実践から自らの実践を省み、新たな気づきを得ていく。従って、スクールリーダーとインターンシップの院生は互恵的な関係の中で実践を省察し合い、深め合うことになる。また、拠点校には教職大学院のスタッフが定期的に訪れ、各院生の指導を行うとともに、拠点校の研究部会にも参画し各校の協働研究を支える役割を担っている。これらの点を特に強調しながら、フォーラム参加者に福井大学教職大学院の取り組みを説明した。

【鈴木寛副大臣の視察】本フォーラムの発表で印象的な出来事として、文部科学副大臣・鈴木寛氏および文部科学省・行政官の方々の視察が挙げられる。鈴木氏は本フォーラムで先に行われていた基調講演のあと、ポスターセッションの視察に訪れ、真っ先に福井大学教職大学院のブースに来てくださった。そこでまず、石井より福井大学教職大学院のインターンシップの仕組みの概要、1年間の学校のサイクルで院生が学ぶことの意義について説明した。それに対し、鈴木氏は関心をもって「福井大学ではいつごろからこの取り組みを始めたのですか？」と質問され、石井が「教職大学院としては2年前からですが、2002年から現在の中核的なスタッフで教職大学院の基盤となった『夜間主・学校改革実践コース』を開設しました。当時の修了生である先生方が現在、客員教授と



教員養成6年制議論始動

免許更新制と調整課題

先生の質を高めるため、免許制度を抜本的に見直し、大学の教員養成課程を6年制修士とする。民主党マニフェストに沿った動きが文部科学省で始まった。ただ、今の4年制ではいけないのか、6年制にするには、いい先生になるのか、免許更新制との関連は、詰めなければならぬ課題は多い。文科省の動きと方向性を考えてみた。(見市紀世子、編集委員・山上浩一郎)

文科科学省内で1月中旬から週1回、教員養成の改革に向けた議論がスタートした。副大臣や事務方の文科審議官をトップに関係局長、課長も出席するなど、改革に向けて意欲を感じさせる布陣だ。教員の資質向上についての意見を、大学関係者や学校、保護者から求めることも発表。今の養成システムの課題や提案を大学に求めたり、ネット上で募ったりする。提案は3月まで受けつける。

過去の改革は細切れ

教員の養成システムは教育の質の向上の核心になる。改革の歴史をたどる。大学組織とカリキュラム見直し。採用後に行政が研修などを設定。義務化が細切れに繰り返されてきた。戦前、初等中等教育の教員は、各都道府県の師範学校で養成された。その師範学校などの教員を育てる役割は、高等師範学校が担い、教員を専門家として育てる体系ができていた。戦後は、戦争への反省もあり、教員は免許取得者でなければならぬ。「免許主義」と、国公私立を問わず、教職課程を修了すれば免許が取得できる「開放制」が原則となった。

その後の大きな改革は、80年代に小中学校、とりわけ小学校の教員を養成する母体を国立大

学歴	短期大学等	大学
大学院	3.5	6.1
国立教員養成系大学・学部	41.0%	67.1%
小学校	25.8(99年度 40.2)	1.7
中学校	12.6(95年度 17.9)	0.7
高校	63.3	23.4

＜()内は過去15年間でピーク時の数字＞

は10年目の研修を義務づけた。06年度には「免許更新制」と「教職大学院」導入が決まった。更新制は10年ごとに基本などで講習を受けて免許を更新する。大学院は、新たな知識を身につけて質を向上させることを狙い、学部卒の学生が進むコースと、現職教員らが教育委員会などから派遣されて学ぶコースがある。更新制は09年度、教職大学院は08年度に始まった。

長期実習 一部で導入

6年制導入議論で検討課題の一つになりそうなのは「実習」だ。教壇に立つ前に、どの程度、実践を積ませるか」という点だ。今の教育実習は2〜4週間程度。そんな中、福井大は、採用試験に合格し、教職大学院に進んだ院生に1年間の長期教育実習を導入している。教職専門性開発コースの院生は週3日、地元の小中学校に通う。学校の中間サイクルを理解して仕事を学ぶのが特徴だ。1月下旬、福井市至民中学校で、2年生の理科の実験が行われていた。担当教



授の翌日、大学院で院生と大学教員が参加して振り返りや報告をする「カンファレンス」があった。中山さんは松木教授から「昨日の実験であんならどんな授業をやるの?」と問われ、考えた後、「予想を立てさせるとか、でも難しい」と悩んだ。他の院生も一緒に、よりよい授業にし、生徒の理解を深めるためにどうしたらいいかの議論が続いた。

実習が短い学部時代と違い、いずれの院生も「学校から」お客さま扱いされない。08年度に至民中に通った2年の青柳宏治さん(24)は「学部時代は授業のやり方を見るだけで精いっぱい。子どもの学びの姿や先生が力量を高めている姿を見て、目指す。ベテラン教師が描いた」と話す。院生を受け入れる学校の負担はどうか。至民中の津田由起枝校長は「お互いにメリットがあり、負担はた

は思わない。いろいろな立場の人が学校にいる方が子どもの社会性を育める」と話した。長期実習で教員の質を高めようとする「福井方式」は広がるのか。大学院の寺岡英男・教職開発専攻長は「大学で学んだ理論と実習のサイクルが力量を高めていく。それには1カ月では足りない」と話す。大学院の教員が研究室にこもらず、学校を拠点に協働研究に取り組み、学校側も教員や院生を受け入れるのが望ましい」と話す。

特集 1： 教職大学院修了生の現在の実践と取り組み

今回は特集として、昨年度の教職大学院修了生である先生方に現在の実践と取り組みを報告して頂きます。先生方のご報告から、教職大学院での学びがいかにか先生方の現在の実践、専門的成長、そして学校の協働研究に活かされているかが読み取れるのではないかと思います。

「学ぶ喜びを感じる」～理科と家庭科のコラボ授業～

あわら市金津中学校 荒川 誠

昨年スタートした金津中学校内における教科を超えた勉強会は、今年は規模を縮小し、理科と家庭科の教員を中心に取り組んでいる。理由は、授業実践をベースにするために人数を絞りたかったことと、理科と家庭科は生活に密着した教科であり、共同研究に適していると考えたからである。研究テーマを「日常生活における知識の活用」とし、理科と家庭科の教員がチームを組み、いくつか授業を企画し実践した。今回は、教員が協働して取り組んだ結果から得たものを簡単に報告する。

1 生徒たちが学ぶ喜びを感じる

「習得」した知識・技能を用いて「思考」させ、「活用」する力が身に付くとき、生徒たちは学ぶ喜びを感じる。感じた喜びは、人に話したくなる。

「家に帰ってからもやってみたい。」

「お母さんに教えてあげたい」

理科と家庭科のコラボ授業の後には、いつもこんな声が聞こえてくる。

2 生徒たちが求める学びが見える

コラボ授業の後のアンケートで、このような授業をどう思いますか？と問いかけた。

「先生がしゃべらない授業は楽しい」

「自分たちで考える授業は楽しい」

知識を「習得」させることは、基礎であってすべてでない。大事なはその習得した知識を「活用」させることである。活用させる活動こそ、グループ活動の神髄である。グループ活動の価値を考えるきっかけになった。

3 生徒たちの学ぶ姿が見える

それぞれの教科で「習得」した知識・技能を、生活の事象に「活用」する学習活動を目指した。そのポイントとなるのは、「思考の焦点化」である。何について考えるのかをはっきりさせなければ、思考することが出来ない。また

どんな思考をしているのかわからなければ、思考が深まっていけない。そのため思考過程を記録するスケッチブックやワークシートを工夫した。

また様々な考えがぶつかり、より思考が深まるようにグループ討議やコの字型スタイルなどの形態を取り入れた。そういった活動が生徒たちの学びを築き、また教師にとって見えにくかった生徒たちの学びに気づくことにもつながっている。

4 教師同士が学ぶ喜びを感じる



1月の下旬家庭科の先生と、理科で使用する重曹（炭酸水素ナトリウム）と調理を関連付けた授業を検討していたとき、家庭科の先生が聞いてきた。

「重曹って、エコな洗剤として商品化されているけど、なぜ重曹が洗剤になるのか？」

重曹が水に溶けてアルカリ性になることが関係しているわけだが、重曹が洗剤として商品化されていることは、新鮮な情報であった。家庭科の先生にとっても、その理屈がわかった瞬間だった。このような学びを生徒たちにも伝えたいと思った。

先述したように生活に密着した教科だからこそ、一緒に教材研究をする価値は大きい。どの学校でも家庭科の先生

の数は少ない。一緒に授業を作り出す活動を通して、お互いが学びあっていると感じている。

理科と家庭科のコラボ授業を1年間通してみて、その価

値を実感している。今後は、いろいろな教科とのコラボにもつなげていきたいと考えている。

教職大学院修了から1年

あわら市金津中学校 水持 直幸

教職大学院を卒業して1年。この1年は、自分にとって新しい様々な経験を積む1年となった。

「教職大学院での経験をいかして頑張してほしい」ということで、初任者研修の拠点校指導員として4校4名の新採用教員と関わることになった。週に一度ずつ初任者の学校を訪問し授業を参観する。そして、どうするとより良い授業になるかや、生徒の様子からみた授業の進め方などについて話し合っている。また、一般研修として、様々な校務に関することや教育について話し合っている。

この1年間で、約100時間の授業を見せていただくことになった。新採用の教員は、中学数学、中学理科、小学校特別支援と多岐にわたっており、自分の専門外の教員ばかりである。最初は私自身が初任者に対して指導できるのか不安だった。しかし、余り構え過ぎず、自分の経験を語ったり、話を聞きながら共に考えていくことで、初任者自らが何か気づききっかけになってくれればと考えるようになった。また、積極的に新しい教材を作ったり、熱心に部活動や子どもと関わっていく初任者の熱い思いやパワーに感心し刺激を受けた。教職大学院で、教科を超えて話し合うことの大切さや、子どもの姿から授業を見取るとい

う姿勢を学んだがそれを実践する場となった。しかし、取り組みれば取り組むほど自分の未熟さを改めて感じることもなった。こらからも教員として「自ら学ぶ姿勢」を持ち続けていきたいと考えている。

2月には、坂井地区社会科研修会で、丸岡南中学校の鈴木先生と教職大学院でまとめた実践報告書を基に、2校の探究的な社会科の授業の取り組みを紹介し、教職大学院でのラウンドテーブル等についても紹介することができた。研修会にあたり、自分自身の実践報告書を読み返すと、自分の教師としての歩みを振り返りながら、今後の教師としての指針を見つけ、生き方を探していたように感じた。忙しかったけれども、多くの人と出会い、新たな取り組みを知り、実践し、改善し、教育について話し合った教職大学院の1年間は本当に充実した貴重な時間だったと振り返ることができた。

訪問する学校で教職大学院に通う先生から取り組みを聞いたり、研究会等でスクールリーダーの先生のような取り組みを見聞きたりすると、教職大学院の広がりを感じることができた。今後も教職大学院に注目しつつ、機会があれば関わりをつなげていけたらと考えている。

教職大学院を終えて1年

福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 酒井 晴美

教職大学院を終えて1年。現在は、私が所属する中学部の「ゆうゆうタイム」の実践のまとめ作業中です。「ゆうゆうタイム」という生活を手作りする活動の中で、「見える」という見通し、「感じる」という気持ちを織り交ぜながら、生徒達の「自分らしく生きる学びの創造」を、事例研究を通して検証してきました。2年間の取り組みで、生徒達は活動を楽しみ、活動にはまることで自己表

現をしていると感じました。技術の向上が、楽しさや意欲や自信を支えることに改めて気づきました。支援されるのを待つだけでなく、人をみて、それを手がかりに自ら考え動いたり、自ら人に聞いたりする姿がありました。生徒達は活動に主体的に取り組むようになり、教員の支援も直接的な声かけ・見本提示などから、見守り、共に喜ぶというように質的に変わっていきました。こうした

ことを、教師一人ひとりが事例を書き、それをもとに語り合うことで、「あのときこんな気持ちだったのか」「あれがターニングポイントだった」など、埋没してしまいそうな小さな変化を丁寧に追うことで、生徒達の「自分らしく生きる学びの創造」のプロセスを省察していきました。それを教師同士で共有することで、次に生かすこともできました。この実践は教員の中に浸透し、「関わる人」や「活動の場」を広げつつ発展させたいと考えています。生徒達の見通しの広がりにつれ、教員も見通し・展望を広げ、「来年はこんな事をしたい」という話題が日常的にあがっています。また、教師自身が活動を楽しむこと、はまることが生徒に伝わり、生徒も五感で心で楽しさ・おもしろさを感じることも実感しました。しかし、生徒達が活動に参加する、社会参加するには、「見える」「感じる」だけでなく、もっといろいろな視点を考えること、この学びが小学部からどうつながって、高等部ひいては就労にどうつながっていくかを、改めて明らかにしていく必要性も感じています。

そして、最近の出来事。「ゆうゆうタイム」で、この子はもう一人でできるだろうとやらせてみたら、実はそうではなかったということがありました。そこから考えていることは、「みんながいるからできる」ことはとても素敵なことだけれど、「みんながいないとできない」状態になっていないかということ。教員も無意識のうちにながずきや表情などで支援をしていたということに今更ながら気がつきました。どんな状況で、どんな支援でその子にどうなってほしいのか、一人ひとりのアセスメントや支援、何より将来の姿を描くことの大切さを、今更ながら痛感しているこの頃です。2年間の取り組みがあったからここにまた戻ってきたのかもしれませんが。

教職大学院での学びは、自分にとってどうであったのか、忙しさに紛れて1年経った今でもまだきちんと省察はできていないと感じます。こうしてニューズレターを書くのは、「省察をしっかりと」という声なのでしょうね。

2年目の「協働による授業改革を目指す」取り組み

若狭町立熊川小学校 松宮 弘明

教職大学院の学びと現職の勤務という忙しさの中で、充実感とともに怒涛のごとく過ぎた平成20年度でしたが、さらに、ステップアップできると期待した21年度もあつという間に年度末を迎えてしまいました。2年目の今年、いったい自分自身にどのような変化があり学校全体にもどのような学びがあったのか振り返りたいと思います。



本年度、予定通りクラス減少による2名の教員減は、ローブローを効かされながら確実なパンチとして学校全体に降りかかっているように感じられました。しかし、子どもの学びを中心とした研究は一步も引いていないと確信しています。

まず、国語科授業づくりでは、一昨年度から取り組んでいる熊川スタイルの学習が子どもたちにも浸透し、内容面で勝負できるようになってきていることが一番の成果といえます。特に、本年度の「わらぐつの中の神様」の実践において、自らの力で考え書き込んだ発表をつないで、主人公のものづくりの心にせまる授業は、「友達の考えに反応し、みんなで読みを深めるための授業を構成する」というねらいに迫る授業づくりが、十分とまではいきませんができあがりつつあるといえます。これは、子どもの発言をつないで価値にせまっていくという、子ども自らが判断し、解決策を見つけ、表現し、共に高まっていくという本校が目指す授業づくりの姿として一つの形になりつつあるといえます。今後、このような子どもの姿がどの教科にも、

また、全校の子ども達の姿として広がり定着していくように実践を積み重ねていかねばならないと考えています。

次に、授業改善の実践が、協働による研究として昨年度の実践と比べてどのような高まりがあったかについて振り返ってみたいと思います。大きく研究スタイルが変化することはありませんが、極小規模校である本校であっても、少人数スタイルによるセッション形式の研究会は引き続き行われました。中でも進化を遂げたのは、その内容です。事後の授業研究において、子どもの学びと教師の手立てをマトリックス表に表わし、参観者が見とったことを付箋に書きこんで提示していきます。これをもとに、子どもの学びの姿とその指導との関連を明確にし、さらには、次の一

手である、どのようにすれば学びが深まるかに焦点化させた話し合いが可能となりました。これは、短時間の研究会でも深まりがあり、自らの実践に生かすポイントを与えてくれる優れた取り組みとなったと考えています。このような、進化の反面、本年度末に行う予定であった、一人ひとりの実践の振り返りの時間と実践記録集の発行ができないう状況になっています。冒頭申し上げた事情等がありますが、何より自分自身の強い実践力が足りなかったことを深く反省しています。

まだまだ道半ばです。今後も、全職員が協働して、授業を中心として子ども達の確かな学びにつながる実践を続けていきたいと考えています。

特集 2： 冬季集中講座における学びの履歴

2009年12月25-27日および2010年1月5-7日の計6日間、冬期集中講座が行われました。今回の集中講座では院生同士で互いの実践を語り深め合いながら、M2の院生は教職大学院における2年間の学びと成長を一つの物語としてまとめる「長期実践報告」の執筆を進め、M1の院生はこの1年間の学びを振り返り文章化し、自らの成長の軌跡を意味づけていきました。そこで、M1の院生3名の報告から冬期集中講座における学びとその具体的な内容について紹介します。

教職専門性開発コース1年 北島 亜実

(福井大学教育地域科学部附属特別支援学校インターンシップ)

冬季集中講座は3日間という短い時間でしたが、自分の実践を振り返るいい機会となりました。講座を受けて改めて「自分が日頃行っている実践を振り返り、書くことの大切さ」を知りました。自分が何を目的として子どもたちの支援を行っているのかを改めて書くことで自覚することができました。記録を読み返していて私にとって4月からの8カ月間は、本当に内容の濃いものだと思います。その分まとめるのが大変でしたが、小グループの担当の先生やスクールリーダーの先生のアドバイスを頂くことができとても勉強になりました。そこでまとめるにあたって、起こったこと、そこで感じたことすべてをまとめようとするのではなく、1つのテーマに沿ってまとめていこうと考えました。

私は、インターン先の特別支援学校で主に関わっている生徒とのコミュニケーションを中心にこの1年をまとめ

ていこうと考えています。生徒と1年間関わってきて学んだことの1つに「子どものサインを受け取り、考察する大切さ」があります。例えば、生徒が掃除をすることが嫌で独り言をいつもより大きな声で言っていることに対して私が叱ってしまったということがありました。私は、その生徒が独り言を言っていて掃除を全然しないということに怒ってしまい、独り言の行動の裏にある意味を考えることができていませんでした。しかし、この生徒と関わっていく中で、掃除のときの独り言は自分の気持ちを落ち着け、掃除をがんばってしようとするために言っていたのではないかということを考えるようになりました。このように関わっている生徒のことを知っていき、気持ちを読み取ることが生徒との信頼関係を築く上で大切だと思いました。他にも、生徒と関わっていく中で気付かされたことはたくさんあります。そのサインに気付かなかったことを今は、

とても反省しています。しかし、4月の自分に比べると少しずつですが生徒の気持ちに気付くことが増えたように思えます。

今年の3月でインターンは終わりますが、主に関わって

いる生徒と継続的に関わっていきたくて考えています。関わることで私もその生徒からまた色々なことを学んでいきたいです。

教職専門性開発コース1年 小出 哲也

(福井大学教育地域科学部附属小学校インターンシップ)

今回の冬季集中講座ではこれまでのインターンシップを振り返り、長期実践報告書の概要を書き始めました。私は、日々のインターンシップに追われてどういう構想で書くかを全く考えておらず、とりあえず私自身が特にインターンシップで力をいれていた授業実践から振り返ることにしました。書いた内容はいかに記述する通りです。

インターンシップを通して、実際に授業する機会をいただいて少しずつ授業を計画して実践することに慣れてきました。特に小学校でインターンシップを行なっているので自分の専門外の教科の授業をすることもあり新しい学びもたくさんありました。私が大学時代の教育実習の時と一番変化した部分は恥ずかしい話なのですが、学習指導要領を読むようになったこと。そして、指導書や授業マニュアルの本にたよらなくなったことです。指導書や授業マニュアルの本を見ていた理由としては、「短時間でよい授業を作りたい。何か教材として使いたい」という横着な気持ちがあったからだと思います。しかし、そのような気持ちで授業をすると上手く授業をしなければならないという気持ちの方が強くなり、子どもの実態に応じた授業はでき

ていないことに気づかされました。御指導を頂いている先生からも「上手い授業なんてしようと思わなくていいです。子どもの様子をよく見ながら子どもと一緒に授業をつくりあげていく方が大事です」というアドバイスを頂きました。また、教材は日常生活にたくさん溢れていてそれを自分で追い求めていく姿勢がなければ真の授業づくりとは言えないと分かりました。そのような姿勢が少しでも授業者にあれば子どもの授業に挑む姿勢が違ふと実感しました。まだまだ私には試行錯誤することが足りないと思います。そして、授業をした後重要になってくるのが授業後の「振り返り」だと思います。「成功した」とか「失敗した」と一喜一憂で終わるのではなく、1時間の授業を自分なりに振り返り、子どもの学びはどうであったかを省察することが次の授業に生きてくると思います。

冬季集中講座を通してこれまでの私自身の思いを言語化する土台ができたとともに、あらためてどういう気持ちで授業実践していたかを振り返ることができ、新しい課題が見つかったと思います。残りのインターンシップで課題を一つでも克服できるように努めていきたいと思っています。

教職専門性開発コース1年 中山 侑子

(福井市至民中学校インターンシップ)

ストレートマスター1年目である私は、今回初めて冬季集中講座に参加しました。この冬季集中講座は3日間連続で行われ、実践報告書の作成に向けて、各自がこれまで行ってきたことを振り返り、まとめていきました。

私は現在、教職大学院の拠点校である至民中学校で週3回インターンシップを行っています。このインターンシップは教職大学院に入学してすぐの4月から今年の3月までの1年間に渡って行われます。時が経つのは早く、インターンシップも残り2ヶ月を切っています。今振り返ってみ

ると、このインターンシップで行った授業実践や、普段の何気ない生徒たちや先生方との関わりから学んだことはとても多かったように思います。何よりもこの経験によって、自分の中にある教師観がとても豊かになったと実感しています。しかし、こんなにもたくさんの学びがあったにも関わらず、学校で慌ただしい毎日を過ごしていると、自分が行ってきた実践と向き合うことをどうしても後回しにしてしまうことが多かったように思います。私自身一度じっくり自分が行ってきた実践と向き合う必要があると

感じていた時に、この冬季集中講座が行われました。3日間じっくり実践を振り返り、それを文章にしていくと、自分が行った実践をさまざまな角度で見ることができ、自然と自分の中で省察が行われていることに気が付きました。さらに、この冬季集中講座では各自が実践を振り返り、まとめていくだけではありません。3日間の報告書作成と同時に、教職大学院の教員と院生で小グループを作り、カンファレンスも行いました。この小グループのカンファレンスでは、自分が何をテーマに実践をまとめていこうとしているのか紹介し合ったり、まとめていく上で生じた悩みを相談し、意見交換などを行います。1年目の私にとって、これまで自分がインターンシップなどで積み重ねてきた

ことをまとめ、報告書を作成することは非常に難しいものでした。そこで、そのことをこの場で相談してみました。すると、これまでのインターンシップで自分を大きく変えることになった出来事はどこであったかを思い出し、その部分を詳しく書くといいのではないかという助言をもらうことができました。

このカンファレンスによって、これまでの私には無かった新たな視点を得ることができました。2月下旬には、それぞれの院生が実践をまとめた報告書を持ち寄って発表する機会が設けられています。この冬季集中講座で得たことを参考にしながら、インターンシップの集大成として、私の実践を報告したいと思っています。

福井大学教員免許状更新必修講習を終えて

教員免許状更新講習から見えてくるもの

福井大学教職大学院 長谷川 義治

2010年1月6日の「教育実践と教育改革Ⅱ」及び「特別支援教育の最近の動向と課題」（いずれも選択）で、今年度の福井大学教員免許状更新講習はすべて終了した。私は、必修領域の講習担当者の一人であると同時に、教育地域科学部等教員免許状更新講習運営委員長も務めさせていただいた。今年度の更新講習を振り返り、そこから見えてきたものについて述べたいと思う。なお、Newsletter No.16に関連記事を掲載してあるので、そちらも一読願いたい。

1 教師への敬意

今振り返ると、福井大学の更新講習は、「教師への敬意」から始まったと言っても過言ではない。平成20年夏に予備講習を実施し、その事前説明会で配布した資料の中に、稲垣忠彦氏（信濃教育会教育研究所長・東京大学名誉教授）の「教師が成長する学校づくり」がある。その中に、

大切なことは“教師への尊敬”です。それなくしては教師の力を高めるといふ話は始まりません。

というくだりがある。これを受講者に読んでもらった時、受講者の表情、その場の雰囲気は柔らかくなった。私たちが目指す更新講習に自信が持てた瞬間でもあった。

2 福井大学方式

本年度の必修領域の講習の特徴は、①必修12時間に選択6時間を加えて18時間（連続3日間）を一つのまとまりとして受講できるようにした。②形式は「省察」型にし

た。すなわち、多人数伝達型の講義よりも、少人数グループによる話し合いを基本にした。③校種、年齢、教科等の壁を超えたクロスセッションを中心にしたなどである。

特に、①については学部内で議論になった。文部科学省が必修12時間と言っているのになぜ18時間なのかと。予備講習の成果を踏まえてと説明し、一応の理解は得られたが、その前提には「教師への敬意」があった。そして、選択講習を担当するにあたって、学生と現職教師との違いを踏まえてほしいとお願いした。

平成21年6月の事前説明会に、稲垣忠彦氏の講演も実現した。改革は学校から始まる、学校こそが研修の場などの話を聞いて、参加者の中には、「53歳で更新講習を受ける意味が理解できた」と言ってくださる方もいた。

3 受講者評価の概要

必修を7講習、選択を51講習実施した。（ただし、募

集はしたが、開講最少受講者数に達せずに取りやめた講習が10講習ある。)

受講者評価については、講習ごとに、「講習の内容・方法」「知識・技能の習得の成果」「運営面」の3項目について回答してもらった。その集計結果を見ると、必修が受講者481人で、全体平均は、「よい」が42.7%、「大体よい」が47.5%、「余り十分でない」が9.3%、「不十分」が0.5%であった。また、選択は受講者1,068人で、全体平均は、「よい」が50.1%、「大体よい」が43.7%、「余り十分でない」が5.9%、「不十分」が0.3%であった。いずれも、「よい」「大体よい」と回答した受講者は90%以上になっていて、とても高い評価をいただいた。

4 福井大学が近くなった

受講者の中には、「福井大学が近くなった」と言う方もいた。教員養成系学部を有する大学として、素直に喜んでばかりもいられないが、とてもうれしく思う。一方で、講習担当者の大学教員の中にも、日ごろ、指導している学生の近い将来の姿がイメージすることができて、学校現場を身近に感じられた方もいたのではないかと思う。

福井大学としては、教職大学院の開設を契機に築いてきた、教育委員会・学校との信頼関係を強化していくことが重要であると思うとともに、受講者にあっては、それぞれの学校の中で「協働」し、「省察」することで同僚性を深め、学校を活性化していくことが重要であると思った。

今回の講習を通して、新しい教師教育の可能性を感じた。

教員免許状更新講習報告

福井大学教育地域科学部発達科学講座・教職大学院協働研究員 八田 幸恵

2009年12月24-26日に、福井県立大学小浜キャンパスにおいて、必修領域の講習を行った。協力者の先生方のおかげで、非常に和やかな雰囲気の中で3日間の講習を終えることができた。ありがとうございました。この講習をもって、2009年度の必修領域の講習は、すべて終了したことになる。そこで、次年度以降のプログラムを発展させるために、課題を記しておく。

必修領域では、公刊されている実践記録を読み実践の筋をつかんでまとめるということを行っている。読んでいただくにあたって、複数のスタッフで幅広く実践記録を収集し、その中から「よいもの」を選択した。

しかし、更新講習に参加してみて、改めて気がついたことがある。それは、いろいろな種類の学校で（このような表現が適切なのかわかりませんが）、いろいろな立場の先生が、いろいろな領域で子どもたちの発達を支えて

いるということである。これは当たり前のことであるが、つい忘れてしまいそうになる。学校教育を対象にした研究では、公立普通科の学校における教科学習・生活指導を念頭において論を組み立てる傾向にある。それに呼応するかのように、実践記録も、公立普通科の学校における教科学習・生活指導の記録が多く公刊されている。しかし、職業学校の実践、定時制高校の実践、特別活動の中でも部活動の実践、私立学校に特徴的な実践、非常勤講師の先生の実践...となると、ぐっと数が減ってしまう。

今後、すべての先生が実践を書き公にすることを励まし、またすべての先生の実践の事実をつかみそれに学ぶ必要がある。必修領域で実践記録を書いていたideているのはその一環であるが、同時に、来年度に向けて現在公刊されている実践記録をもう一度注意深く検討することも必要である。私の課題としたい。

平成 22 年度概算要求 特別経費（プロジェクト分）通る

福井大学教職大学院 寺岡 英男

事業仕分けで通るかどうかわからなかった平成 22 年度概算要求 特別経費（プロジェクト分）として教職開発専攻から出していた要求が通りました。教職大学院は教員養成のモデルカリキュラムを提案することを任務としていますが、それに応えるために国内外の共同研究ネットワークを構築しながら、プログラム開発を行い、併せて新しい外部評価のあり方を探ることをこの概算要求では目的としています。以下その概略を紹介します。

事業名：福井大学モデルによる教職専門性開発と国際共同研究ネットワークの形成

ー教師の専門性基準の構築と教師教育プログラム開発を通してー

事業概要：OECD/PISA 等が提唱する新しい学力の実現には、高い専門性と実践力を有する教師の育成が不可欠である。その教師育成のため、福井大学の教師教育改革の実績を基に国内外との共同研究ネットワークの下、教師教育プログラムを構築し提案する。

事業期間：平成 22 年度～平成 24 年度（3 年）

予算額：50,411 千円

○国内の協力機関

福井県教育委員会、福井大学教職開発専攻拠点校の他、これまで交流の実績のある、いくつかの大学に対して共同研究ネットワークへの参加をお願いして行きたいと思えます。

○国際的な共同研究ネットワーク

これも実績のあるカーネギー財団（スタンフォード大学）、上海師範大学、釜山師範大学、フィンランド・オウル大学等との共同研究を進めていく予定です。

*なお、オウル大学のハッカライネン教授からは、2011 年頃から 3 年間のプロジェクトをフィンランドで申請しており、その中では福井大学教職大学院との教師教育改革での共同研究が盛り込まれています。

○この経費で 3 人目の機関研究員（ポスドク）の新規採用と、事務補佐員の継続雇用が可能となりました。

Schedule

3/11 thu 日本教職大学院協会理事会 (14:00-)

3/13 sat 入学者選抜試験（第 3 次）(9:00-)

3/16 tue 運営協議会 (10:00-12:00)

3/18 thu インターンシップ事前説明会 (13:00-15:00)

3/23 tue 学位記授与式 (10:00-) 会場：フェニックスプラザ

学位記伝達式 (18:00-) 会場：福井大学

【編集後記】 NewsLetter 19 号をお届けします。今回は年度末の発行ということで、福井大学教職大学院における学びをあらためて問い直し、意味づけることを主眼に編集しました。特に、昨年度修了なさった先生方、ストレートマスター1 年院生のご報告から、教職大学院での学びの持続、発展、履歴が読み取れるかと思えます。そして、全ての記事が学びと教えの本質を現しており、全国的に教師教育改革の気運が高まる中、改革の道標となると感じます。記事を寄せて下さったみなさまに心より感謝申し上げます。（木村 優）

教職大学院 Newsletter **No.19**

2010.02.26 発行

2010.02.26 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdftukui@yahoo.co.jp